

2026 年度校友会奨学金 選考評 | 一般社団法人多摩美術大学校友会**水江杏実**

作者は、徹底した観察と丁寧な描写を土台とし、目の前のものをいかにして絵にするかという問いを超えて、モチーフの向こう側を探ろうとしてきた。細部の描き込みが可能な水面の映り込みというモチーフを中心に据えつつ、説明的な要素を抑え、抽象化させた表現で重厚な画面を作るために、曖昧な部分を描ききる表現力と技術を伸ばしてきたことが窺える。構図や素材の追求を通して、さらなる発展を遂げていくことが感じられ、こうした取り組みを後押ししたい。

WU Weiwei

過去作では、デジタル写真における物質性をいかにして抽出できるかに苦心していた様子がうかがえる、そこから振り返ってアナログフィルムによって撮影された写真にみられるノイズ／粒状感に着目し、そのメディア特有の性質が映り込むものを、写真／イメージの中に見出そうとする批評的な姿勢が評価できる。この作品は、いわばカメラにおける飛蚊症を炙り出そうとするような作品なのだろう。一方で近年話題になる AI で生成される画像も、ランダムなノイズからノイズ除去を繰り返して生成されることも思い出す。

増田あかり

絵画は本来、居ながらにして世界を見つめることのできる装置である。しかし今日、その役割の多くは映像メディアが担うようになった。作者の意図は、鑑賞者が作品の周囲を「ぐるりと動き回って見る」ことで風景との新たな出会いを生み出し、絵画に身体性を取り戻そうとする試みである。見る行為そのものを作品体験へと変え、絵画の新たな可能性を切り開く意欲的な表現として評価した。

溝口るな

匂いは、特にコロナ禍以後、より忌避されるものになったのかもしれない。マスクによって外気の香りを遮断し、一方で自身の口臭には麻痺して気付かなくなる。そんな、ある部分は敏感に、ある部分は鈍感になるような、感覚の配置の変化が起きていたのかもしれない。匂いは、目に見えず、周囲に充満している。だから匂いは、常に私たちをゆるやかに空間的に接続するメディアなのだと思う、そうした点に着目し、作品化しようとする果敢な挑戦が評価できる。

原田みな美

作者は、身体と自然が未分化であった原初的な知覚のあり方を、現代の絵画、立体、空間表現として問い直す意欲的な試みを行っている。身体感覚やアニミズム的な知覚を制作へと接続し、徳之島での経験を踏まえたフィールドワークが作品に説得力を与えている。身体性を伴うインスタレーションや自然現象を取り込むドローイングも研究テーマと有機的に結び付いており、今後の制作・研究の発展が大いに期待される。

沖横田夏美

作者は、ケアのある生活を、苦労や負担だけでなく、喜びや遊びを含む日常として提示している。身近な経験や記憶を丁寧に掘り下げ、映像、立体、冊子を組み合わせることで、言葉だけでは捉えにくい身体感覚や生活の時間を、他者にも共有されうる表現へと展開している。社会の中で見過ごされがちな声や存在に目を向け、ケアをめぐる固定的な見方を問い直す意義深い試みであり、今後のさらなる展開が期待される。

矢澤来

自然という圧倒的なマクロの空間と、物質同士やそこに生まれる空間が織りなす関係性という、ミクロで日常的な視点を往還しながら独自の表現を構築している。作品は、言葉で説明するほど魅力が失われてしまうほど繊細かつ本質的であり、鑑賞者に豊かな「イメージの余白」を委ねる力を備えている。また、自身の作品を過度に囲い込まず、適切なタイミングで手放していく姿勢にも軽やかさと成熟が感じられる。今後も、イメージを作品へと素早く結実させる感覚を大切にしながら、さらなる飛躍を期待したい。

中平果歩

写真イメージを網点へと分解し、独自に調合したインクを幾度も刷り重ねることで、記憶の蓄積と忘却、像の生成と崩壊を同一画面に立ち上げている。インクの厚みやずれ、支持体からの剥離によって、不確かな記憶の残像や呼吸を物質として可視化した点に独自性がある。技法と主題が密接に結びつき、版画と絵画の領域を横断しながら新たな展示方法を提示した意欲的な試みであり、今後のさらなる表現の展開を期待させる。

GUO Xiwen

溶融状態において、微細なガラスの粉がより大きな粒や線状のガラスにどうしようもなく引き寄せられてゆくガラスのふるまい（表面張力）に魅力を見出した申請者は、数々の試行を重ねてその粒や線の儚い結び付きによる表現が自重を支える構造と直結するところに辿り着きかけている。物理的に成立する、しないのギリギリのところで闘ぎ合う表現であるが、ぜひ成し遂げてほしいものである。

JEUNG Minkyung

バーナーワークとは主に管状や棒状の耐熱ガラスを卓上のバーナーで加熱して、元来は理化学機器を合理的に作成するために発達してきた手法であるが、そこから表現に至らんと先人達の様々な工夫により成熟してきた造形分野でもある。そんな先人たちの様々なやり方に触れていきながら実作を重ね自身の表現を獲得してきた申請者は、近年この手法が得意とするサイズ感からすると「超大型」ともいえる表現に挑戦し、ある到達点へと至った。一方で課題点にも客観的に向き合っており、今後の展開に大いに期待します。

LU Ping

作品との出会いの瞬間の驚きもさることながら、その前後にある「物語」に着目した深みのある作品群。作品を形作るマテリアルに対しても、ここに至るまでの文脈や役割に思いを馳せる時間に温かみを感じる。また、積極的に作品発表の機会を設け、計画的に予算を計上できているので奨学生として信頼に値する。今後の活躍に大いに期待したい。

HU Xin

教育制度における評価への承認欲求や、スポーツ競技に内在する服従性など、社会によって形成される身体の反応や抑圧の構造に対して鋭い批評的視点を持っている。その問題意識を、サッカー、日本舞踊、生花といった固有のルールや禁欲的で洗練された身体表現へと昇華し、作品として提示する構成力とダイナミズムは高く評価できる。社会への批評性と美的秩序を両立させる表現には独自性があり、今後さらに作品の射程を広げながら、大きく飛躍していくことを期待したい。

横堀心咲

コイルバネは圧縮や引っ張り、あるいはねじりに対して弾性を利用した復元力を制御する装置だが、ここではバネ本来の機能を越えてアルキメデスの水車やウォームギアなどのような、らせん状、コイルバネ状の形態すべてにまで範囲を広げ、その材料が持つ力の可能性を探るというテーマである。自由な発想で実験を繰り返すことで、見たこともない動きをするような新たな装置が生まれることを期待する。

井上玄太

申請者は、テキスタイルデザインを「人の心理に作用する環境構成要素」と捉えている。これまでも地下街や商店街のシャッターなど、寂しさを感じる空間へテキスタイルによる新たな演出を提示してきた。本研究が挑む都市での「心理的孤立」という課題に対し、テキスタイルデザインならではの視覚的演出と素材感の融合は大きな可能性を秘めている。従来、主に環境デザインや環境色彩の観点からアプローチされてきた領域に、テキスタイルデザインの視点から新たな可能性を切り拓こうとする姿勢を評価した。

小松遥

素材の選定から制作やプレゼンテーションまで、一連のプロセスを通じた体験による知見獲得は大変意義深い。中でも特に素材の探索に注目している点が興味深い。同じ構造・形状であっても素材によって造形は大きく変化する事から、ありふれた素材からの選択を見直し、生産現地の開拓やベンチャー企業との新糸開発によって、希求する新たな造形表現の創出に加え、イノベーティブな開発プロセスの構築にも期待をしたい。

田原陸人

闇市・花街の名残を持つ街に着目し、「計画の不在」の中から生まれた空間の論理を解明しようとする挑戦的な研究である。人の営みから自然発生的に生まれた街の歴史とともにそれらが創出する人間的なスケール感を探究することで、街の特性を明らかにするだけでなく現代社会が抱える課題が浮き彫りにされるものと期待する。

沼尾優華

この研究の優れた点は、「社会の生きづらさ」を「諧謔的な視点」を通して「型染およびシルクスクリーンによる模様」という手法で表現し、「着るメディア」という新たな存在の社会的な可能性を追求するところにある。美意識と諧謔性によって可視化された主題の異なる 4 点の「浴衣」は、「着るメディア」の有する身にまとう衣服の身体性を活かし、街中を移動する一種の社会実験でもある。メッセージ性の高い新たなデザイン研究として高く評価したい。

菊田実優

「地域コミュニティのための空間デザインの提案」という研究テーマの出発点として、“農村舞台”に注目した点を評価したい。近代の価値観により衰退したモノ・コトの象徴の一つとして、“農村舞台”を考察することは、豊かな問いを次々に引き出すことになるだろう。研究者自身がダンスを通じて得た身体感覚がどのように研究に影響を与えることになるかにも、注目したい。

千葉萌夏

過去の営みや知恵を手がかりに、ものづくりや消費のあり方、すなわち「豊かな」生活を再考しようとする姿勢は明確である。ポストヒューマニズム思想に加え、人類学的な視点や調査手法をデザインへと接続する実践研究としても可能性を有する。また、制作対象を限定せず、生活に根ざしたプロダクトへ展開しようとする点にも柔軟性があり、既存プロダクトのリ・デザインにとどまらない新たな提案につながることも期待される。

廣野 唯生

演劇教育において、経験則に基づく感覚的・感情的指導が、パワー・ハラスメントを生む温床になっているのでは、という問題意識を出発点とする本研究は、映画監督の濱口竜介が著書『他なる映画と 1』(2024 年)等でも指摘している、監督が俳優に対し「ダメ出し」をすることによって、結果的に発生させてしまう権力構造を回避／解消し、共同／協働的な創作環境から映画を制作しよう、という問題意識に通じた同時代的普遍性があると思う。